



科学的介護の取り組みでお年寄りを元気に

## 科学的介護の実践と 医療への波及効果

社会福祉法人 上ノ郷福祉会  
特別養護老人ホームこぼり苑

## 法人理念

まんやかに人 みんなが笑顔 かみのごう福祉会

### 社会福祉法人上ノ郷福祉会

熊本市南区護藤町1586番地

#### 高齢者福祉部門

特別養護老人ホームこぼり苑

こぼり苑短期入所生活介護事業所

ケアハウスこぼり苑

こぼり苑デイサービスセンター

こぼり苑居宅介護支援事業所

こぼり苑ヘルパーステーション

共生型サービス事業所 楽しい家飽田南

#### 障がい者福祉部門

障がい福祉サービス事業所 季の庭

シェアハウスGondo

放課後等デイサービスおれんじ

児童発達支援事業所さくらんぼ

#### 保育部門

なないろこども園

かみのごう保育園プチ

えみなる保育園

病児・病後児保育 メディキッズえみなる

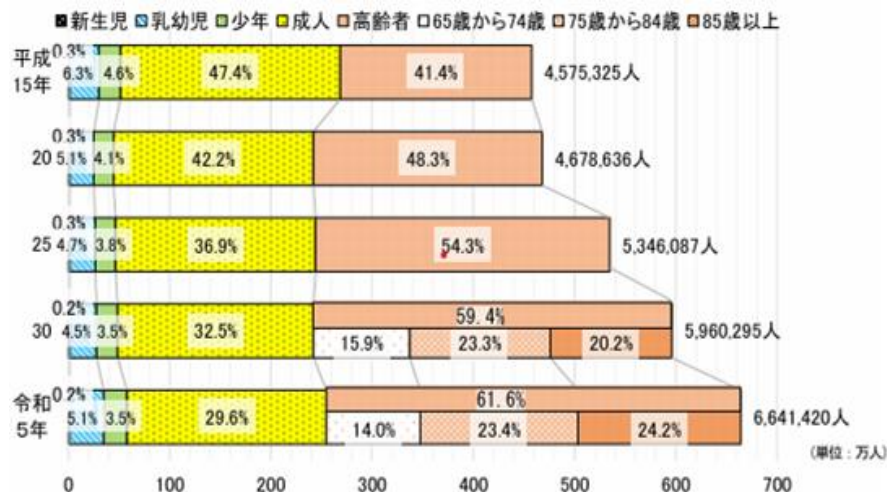


# 科学的介護の実践が、医療連携で求められる社会的背景とは？

超高齢化による85歳以上の人口増に伴い、平成25年以降、救急搬送数の全体に占める比率が急拡大しており、令和7年9月 厚生労働省は、医療と介護の連携により、今後の救急搬送の急増を抑制したいという考えを示した。

## 救急搬送数の推移

年齢区分別の搬送人員と構成比の5年ごとの推移では、85歳以上の人員と比率が急拡大



出典：総務省 消防庁 R7.1.24

## 厚生労働省の動向

医療と介護の連携で  
高齢者の救急搬送抑制へ



2040年を見据えた新たな地域医療構想に関連し、厚生労働省は介護保険施設が入所者の緊急時の対応をあらかじめ医療機関と申し合わせておくことを促す方針だ。

肺炎や尿路感染症といった疾患は、適切に対処すれば、病院に搬送しなくても済むとみている。医療と介護の連携により、今後の救急搬送の急増を抑制したい考えだ。

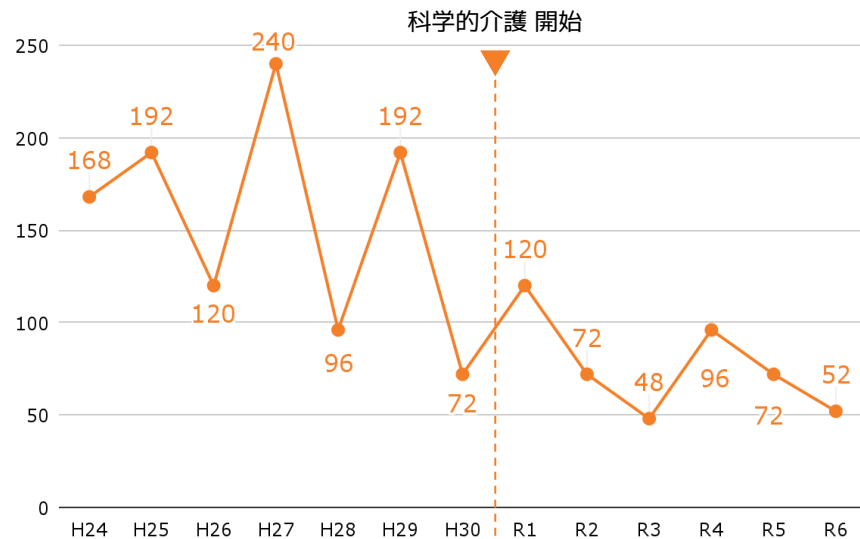
出典：福祉新聞 R7.9.9

# 科学的介護の実践は、医療連携の側面においても有効性を示している

科学的介護の実践により、オンコール数・入院日数・入院数・搬送数の全指標で約6割の改善を確認できた。  
特に入院日数の減少は、施設収益の安定化に大きく寄与した。

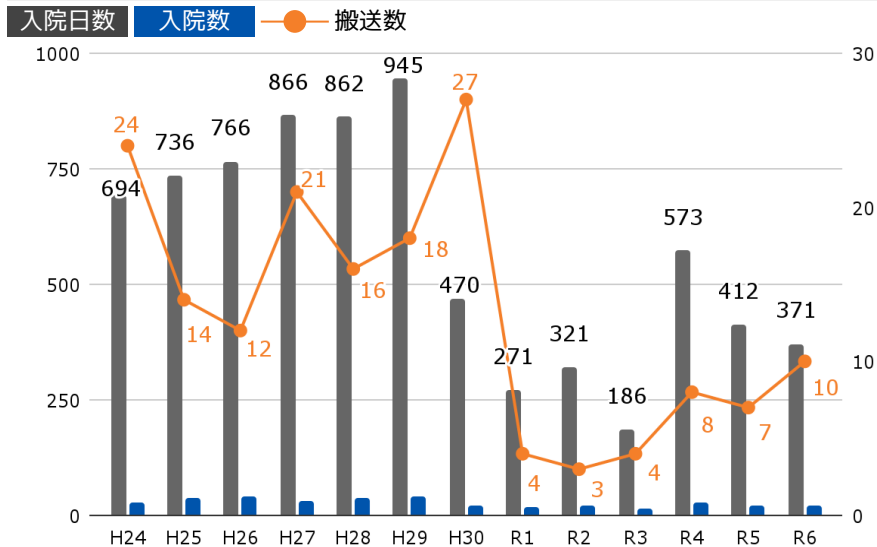
## オンコール数

年間120件あったオンコール数が52件まで  
約6割の削減に成功



## 入院日数・入院数・搬送数

入院日数も最も多かった平成29年から約6割削減



# 実施概要 — 自立支援介護の基礎に忠実に、水分・食事・排泄・歩行ケアに注力した

平成31年2月より、科学的介護の実践(自立支援・重度化防止)を導入した。  
従来のケア内容を精査し、自立支援介護理論に基づく4つの基本ケアを中心とした取組を展開した。

## 水分

- 1日1500MLを目標
- お好みの水分で提供時間を確保し摂取する

## 食事

- 必要な栄養摂取、常食化
- 咀嚼、嚥下の改善を行い常食に進めていく

## 排便

- 自然排便(下剤を使わず腸内環境を改善)、排泄の自立
- 下剤を削減してファイバー等を活用しスムーズな排便

## 運動

- 歩行の回復
- 歩行や運動を取り入れ活動性を向上

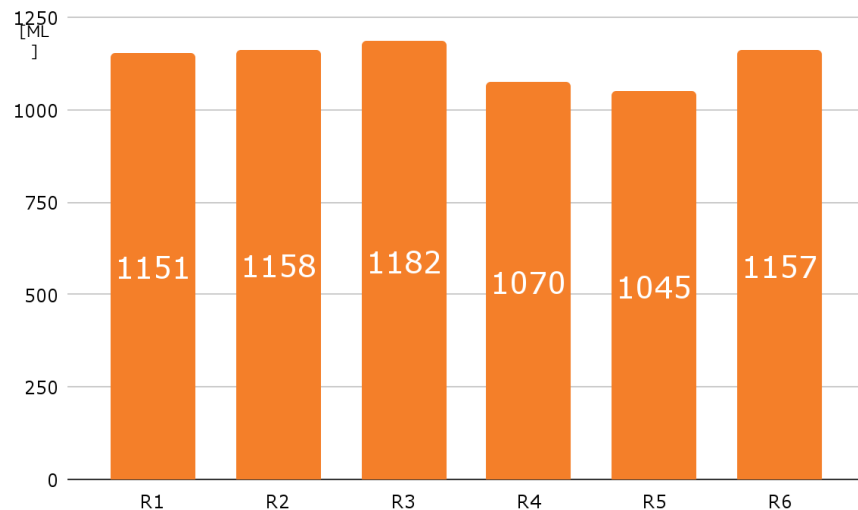


## 科学的介護の取り組み状況 (1/2) — 水分・食事

水分ケアの実践により、十分な水分摂取は脳を活性化し、認知力を高めて排泄コントロールを改善する。  
常食は、咀嚼機能を維持し、栄養価も高く低栄養改善に有効であり、味しく活動的な生活につながる。

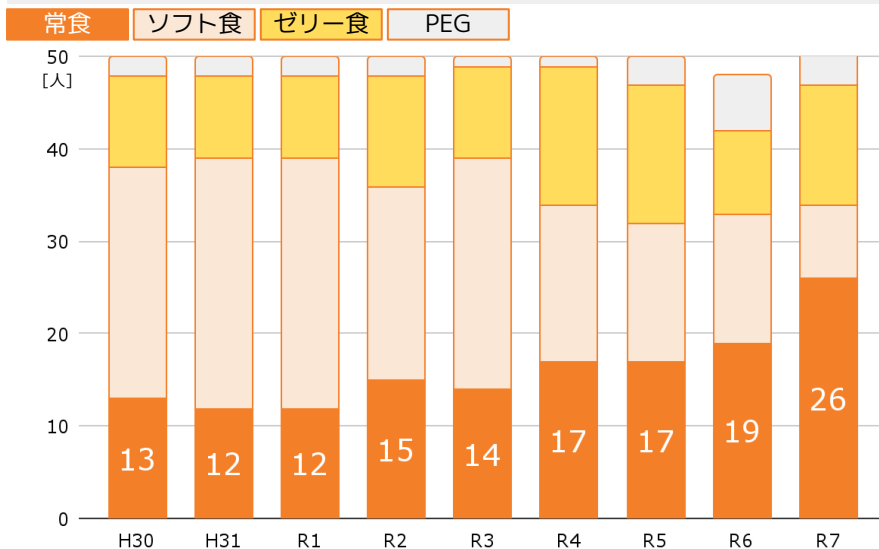
### 1日の平均水分量 (N=50名)

開始当初から、水分量は**1,000ML以上を維持**



### 食事形態の内訳 (N=50名)

利用者の**約半数が常食**を摂取可能となっている

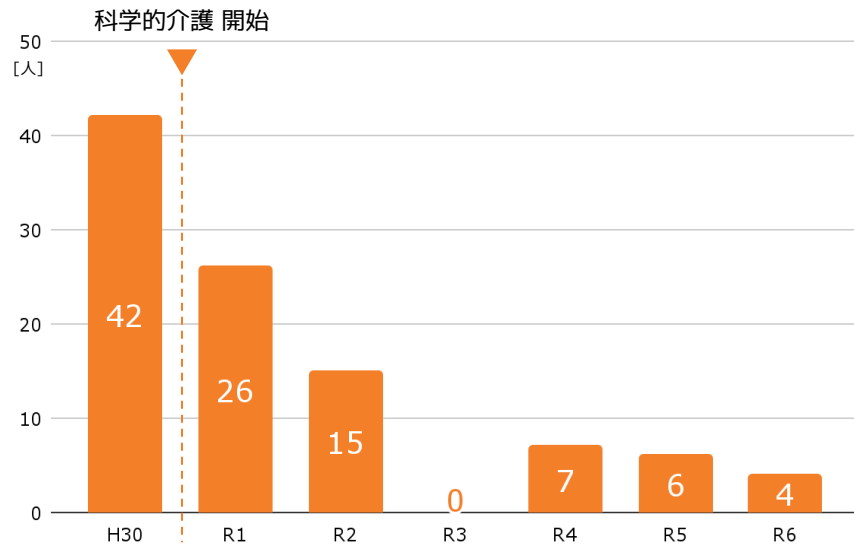


## 科学的介護の取り組み状況 (2/2) — 排泄・歩行

排泄の自立は、高齢者の尊厳と意欲を守り失敗体験の克服が自立への意欲回復につながる重要課題として設定。  
歩行は、筋力強化よりも、歩き方を思い出す支援に重点をおいて取り組んだ。

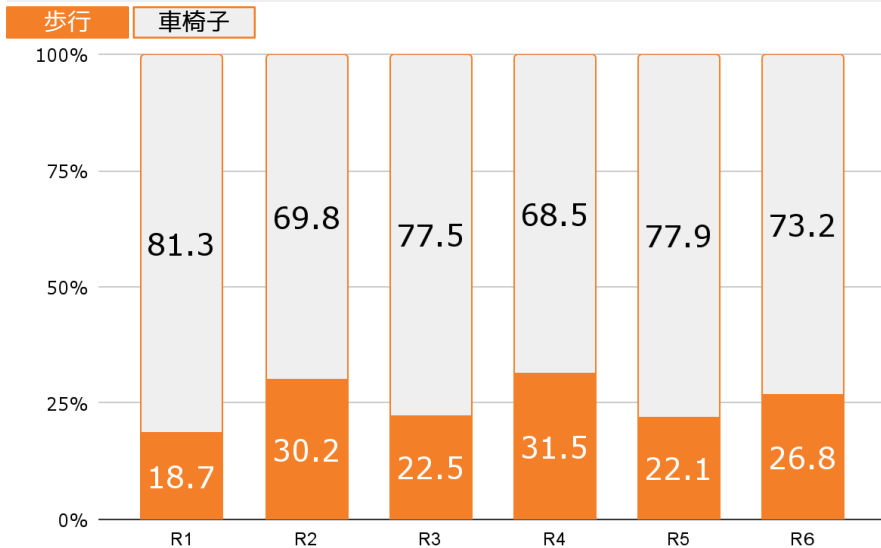
### 下剤服用者数 (N=50名)

取組開始後、下剤の使用を可能な限り中止した



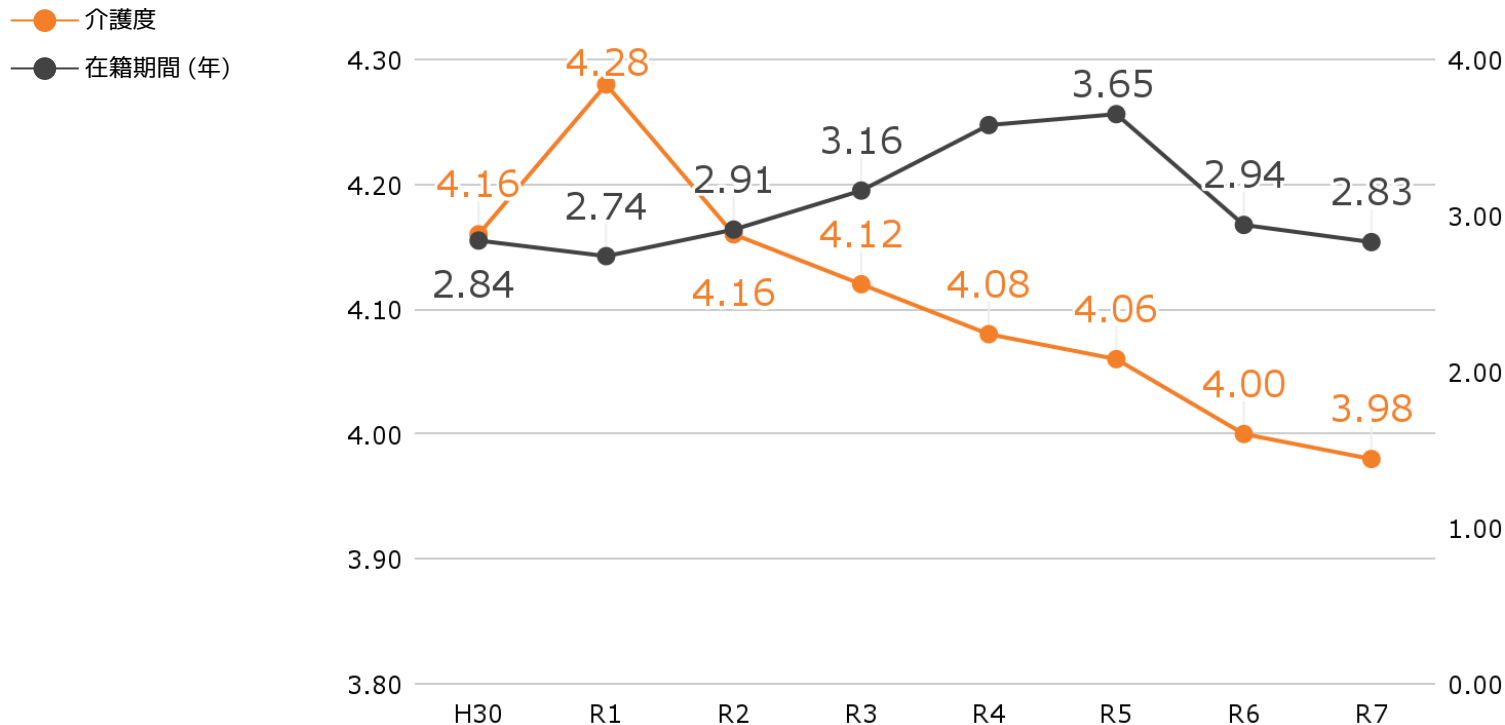
### 歩行と車椅子の割合 (N=50名)

当初、歩行可能な利用者は2割未満であったが  
現在は約3割に達し、開始時の1.5倍に改善した



## 介護度の改善と在籍期間の延伸により、健康で長く生活を継続できるようになった

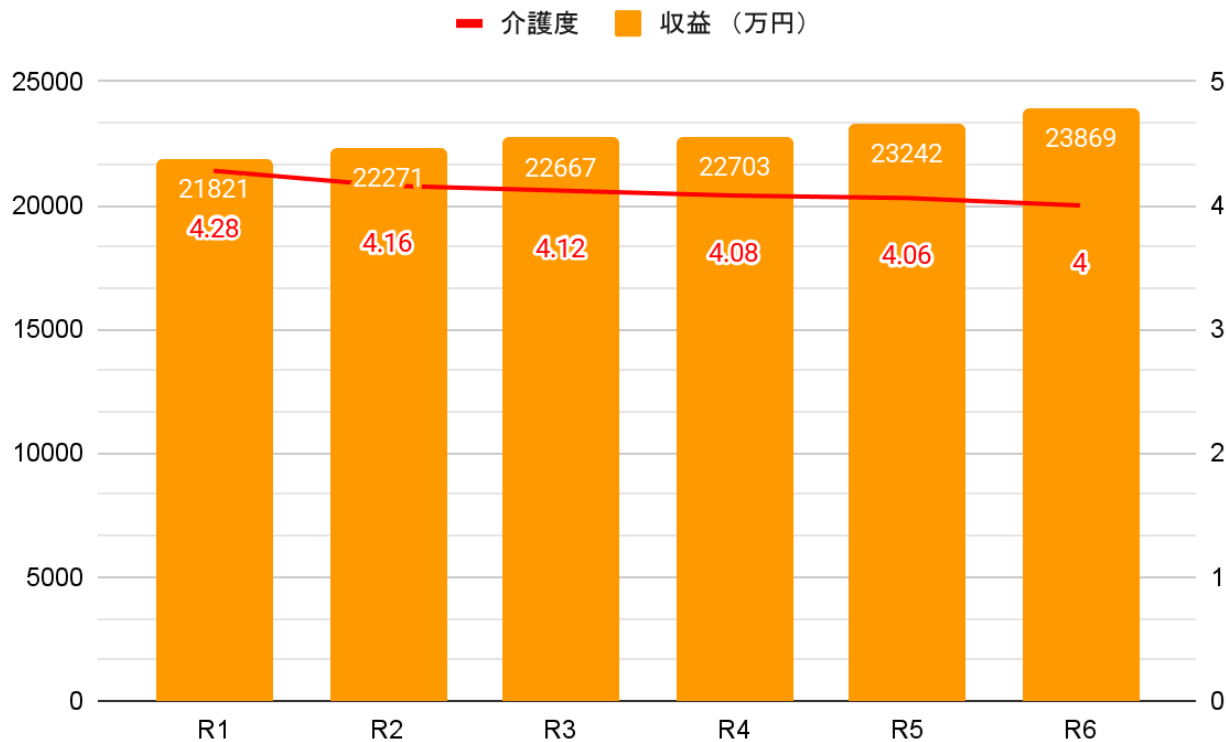
平均介護度は取り組み開始後に年々改善し、直近では4.00を下回った。要介護度の改善により入院や重度化による退所が抑制され、在籍期間が延伸した結果、施設の経営状況にも好影響を及ぼした。





## 介護度が改善しても収益は向上した

科学的介護を実践し介護度は下がっているが、入院日数の減少（稼働向上）しているため収益は増加した。



## 科学的介護の実践は、医療負担の軽減と利用者の健康寿命の延伸につながる

科学的介護の実践により、看護師の夜間緊急対応や救急搬送が大幅に減少し、入院日数も半減するなど医療機関の負担軽減につながった。さらに要介護度の改善を通じて、利用者が健康で長く暮らせる環境が実現できた。

**看護師の夜間の緊急対応が50%減少**  
(平均154.2件/年 → 平均76.6件/年)

**救急搬送が69%減少**  
(平均18.8件/年 → 平均6件/年)

**入院日数減少が50%減少し、医療機関の負担が軽減**  
(平均719.8日/年 → 平均355.6日/年)

**要介護度が改善し、健康で長く暮らせるようになった**  
(平均介護度 4.28 → 3.98)



法人・事業所として、

地域で**科学的介護**を実践し、  
高齢者の**健康寿命を支え**、  
**地域での暮らしを継続**できるように支援。

同時に、  
**科学的介護を普及・啓発をする基幹拠点**に。

ご清聴ありがとうございました。